

「わが神、わが神」

2014年12月08日

マルコによる福音書 15章 33節～38節。昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。

主イエスは、午前9時に十字架につけられ、昼の12時になった。この間、苦しみ続けた。すると、全地が暗くなり、それが午後3時まで続いたという。この暗黒は、マルコ福音書の著者が、主イエスの苦悩を神話的に表現した記述である。神の子が理不尽な仕打ちによって、苦しむ様を暗黒の状況と捉えたのである。そして3時に、主イエスは「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」と大声で叫ばれた。主イエスと弟子たちの日常語であったアラム語で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。4つの福音書には、十字架の上で語られた主イエスの言葉が7つ記されている。それらは、主イエスご自身の言葉ではなく、福音書著者たちが、自分の信仰に基づいて書いた言葉である。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という言葉も、マルコ福音書の著者が、主イエスの口に乗せたという人もいる。しかし、7つの言葉の中で、この叫びは主イエスが、実際に叫ばれた言葉ではないかと思う。

この言葉の意味は何か。詩編 22 編 1 節に「わたしの神よ、わたしの神よ／なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜわたしを遠く離れ、救おうとせず／呻きも言葉も聞いてくださらないのか」とある。この詩編は、神に捨てられた者の苦悩の言葉から始まっているが、最後は「わたしの魂は必ず命を得／子孫は神に仕え／主のことを来るべき代に語り伝え／成し遂げてくださった恵みの御業を／民の末に告げ知らせるでしょう」と神の守りと恵みへの感謝と賛美で終わっている。主イエスは暗唱した詩編 22 編を歌おうとされた。その冒頭の言葉が人々に聞かれ、伝えられたと解釈する。そうかも知れない。私は、この叫びは主イエスが示された愛と真実が、最高法院、ピラト、群衆、そして弟子たちによって打ち砕かれ、主イエスが負わされた罪の暗黒の底から、なお「わが神、わが神」と神に信仰を捧げた、地と天を結ぶ言葉ではないかと信じている。

人々は「エロイ、エロイ」という言葉から「エリヤを呼んでいる」と思った。どうなるかを見たくて、生き延びさせようと、海綿に酸いぶどう酒を含ませた葦の棒を差しだしたが、主イエスは飲もうとはされなかった。そして、大声をあげて息を引き取られた。その時、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けたという。エルサレム神殿の至聖所の前に、神と人とを隔てる印としてケルビムを刺繍した垂れ幕があった。その垂れ幕が裂けた。刑場のゴルゴタと神殿の間には、相当の距離があった。それにもかかわらず、主イエスが息を引き取られた時、罪によって隔てられていたものが取り去られた。すなわち、罪の赦しが実現し、成就した。マルコ福音書は、主イエスの十字架の死によって、神と人が直接結びつく道が開かれたと、神話的表現の中に、神と人との和解の福音を伝えている。